

# 大腸癌に対するロボット支援下手術

外科部長 加藤俊介

☆直腸がんに加えて結腸がんでもロボット手術を開始し、合わせて100例を達成しました。  
☆結腸がんについても保険診療での手術が可能になります。

ロボット支援下手術は、創のちいさな腹腔鏡手術をさらに改良したものです。固定された3Dの視野、関節を有する鉗子により、からだの機能を損なわずにがんの根治度を向上させることが期待できます。大腸領域におけるロボット支援下手術は、2018年に直腸がんが保険適用となり、当院でも2019年から導入しました。2021年度には55件の直腸がんに対して手術を施行し、そのうち約70%の症例をロボット支援下で行っております。また、2022年6月からは結腸がんに対するロボット支援下手術も開始しており、2022年10月に通算100例を達成し、表彰されました。2023年から当院では結腸がんについても保険診療での手術が可能となります。

ロボット支援手術は十分な訓練を経て認定を受けた医師のみが行うことのできる手術です。当院大腸外科には合計3名の認定医師[加藤(ロボット手術指導医)、長野、井垣]がロボット支援下手術を行っています。手術に携わるスタッフ(医師、看護師、医療工学技士)も訓練を積み、徹底した安全管理の元に行われています。

ロボット支援下手術は優れた手術ですが、すべての患者様にロボットが最適であるとは限りません。患者様に合わせた最適な治療を提案し、一緒にがんと闘ってまいりますので、大腸がんでお困りの患者様はぜひ当科にご相談ください。



日本赤十字社  
Japanese Red Cross Society

武蔵野赤十字病院

No. 76

2023年 冬

〒180-8610  
東京都武蔵野市境南町1-26-1  
TEL 0422-32-3111

季刊 情報誌

Eye むさしの

頼れる病院をめざします



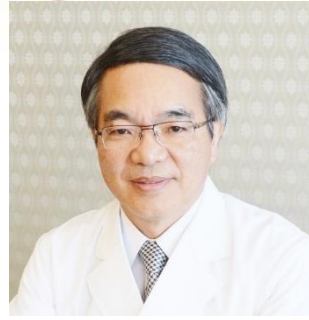
### 基本理念

- 病む人への愛
- 同僚と職場への愛
- 地域住民と地域への愛
- 地球、自然、命への愛

### 基本方針

- (1) 患者・家族から信頼される安全な医療を提供します
- (2) 地域中核病院としての機能向上を図ります
- (3) 地域の医療機関・行政と連携して市民が安心して住める地域づくりを進めます
- (4) 質の高い医療を提供するため、安定した病院経営を継続します
- (5) 働きがいがあり、成長を実感できる職場をつくります





## 新年を迎えて

院長 泉 並木

あけましておめでとうございます。

2020年より新型コロナウイルス感染症のため日常生活や社会活動が制限されて不自由な暮らしをされていることと思います。病院においても、たくさんのコロナに感染した患者さんの入院診療を受け入れてまいりました。コロナウイルスに感染した患者さんの診療を行いながら、地域にとって必要ながん診療や心臓血管疾患、脳神経疾患、整形外科、周産期、救急診療などの通常の医療は職員皆で力を合わせて取り組んできました。このため、地域における必要な医療は滞りなく行うことができたと思っています。

最近心配しているのは、検診や人間ドックを受ける人が減っているのではないかと考えることです。医師会の先生方から紹介をいただいて、できるだけ治療を行っていますが、ここ3年間はこれまでより進行したがんの患者さんが増えているように思うことです。すなわち、検診をうけると無症状でも早期のがんが見つかるのですが、検診をうけない場合には早期にがんが見つかることが減ってしまいます。検診でコロナウイルスに感染することはありませんので、検診はしっかり受けてください。

武蔵野赤十字病院では、病院の機能を高めて高度な医療を行いIT化などわが国が進めている対策に対応するために、新病院を建築しています。感染症の対策をとりやすいように、全病室を個室にして、手術や放射線診療機器を充実させています。2025年に竣工予定ですが、その間駐車場が減ってしまいます。患者さんはなるべく公共交通機関を利用して病院に来ていただきたいと思っております。騒音などご迷惑をおかけしますが、ご理解いただければ幸いです。武蔵野赤十字病院では、今後とも地域の皆さまが安心して病気や怪我の治療ができる体制を作っていきたいと思っておりますので、今年もよろしくお願い申し上げます。

当院の健診センターについて



## 新年のご挨拶

看護部長 奥田 悦子

謹んで新春のお慶びを申し上げます。

昨年は、オミクロン株による第5波から第8波までの波を受けながら「経済を回す」「with コロナ」方向に、社会は変化してきました。しかし、そういった世の中の変化とは異なり病院や主に高齢者施設は対象者の特徴から、世間と同じように変化することは困難でした。そのため当院でも面会を希望される方から「何故、面会が出来ないんだ。病院は遅れている。」等のご意見もあり、職員はジレンマを抱えておりました。

そして第7波が落ち着いた頃、面会制限を一部緩和いたしました。その時、看護師から「部長さん！やっぱり15分でも面会があると、患者さんの表情が違いますね」と声をかけられました。そう話してくれた看護師の表情は、患者さん以上に嬉しそうでした。

患者さんにとって身近な方の面会は心の支えであり、特に高齢者にとっては「せん妄(高齢者に多く発症する一種の意識精神障害)」を防ぐ1つの手段でもあります。手術や抗がん剤等の薬剤の治療、場合によっては入院による環境の変化が、せん妄を引き起こすきっかけとなります。それを予防したいと看護師は考えており、入院時より患者さんのせん妄リスクの確認や予防に力を入れています。しかし、面会制限の一部緩和もつかの間でした。「第8波」と言われる中、東京都の新型コロナウイルス陽性者も連日1万人/日を超え、院内でも陽性者が発生した事から面会制限をせざるを得ない状況となりました。

こうした新型コロナウイルスの影響は、今年も一般社会以上に医療機関は続くと考えております。当院は、高度急性期病院であると共に第二種感染症指定医療機関でもあります。つまり新型コロナウイルス陽性者の治療だけでなく、一般診療である癌をはじめ様々な疾患の患者や救急患者を受け入れる使命があります。地域の中核病院として、611床の限りある入院ベッドを効果的かつ効率的に活用できるよう、職員一同今年も努力してまいります。